



第2章 地域づくり支援と自治体史編纂

木村, 修二 ; 村井, 良介 ; 森田, 竜雄 ; 坂江, 渉 ; 松下, 正和 ; 石川, 道子 ; 佐々木, 和子 ; 添田, 仁 ; 河島, 真 ; 深見, 貴成

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 7(平成20年度事業報告書):17-27

(Issue Date)

2009-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002046>



第2章 地域づくり支援事業と自治体史編纂

包括協定にもとづく灘区との連携事業

昨年度末の3月2日に開催された灘・地域アカデミーの第3回講座「フィールドワーク摩耶山と参詣道」（灘中央まちづくり協議会主催）は、スタッフを含め37名が参加し、怪我人もなく無事終了した。当センターからは、坂江と木村が主なガイド役となり、天上寺では添田による中一里山の解説も行った。



本年度の活動は特記すべき事項はないが、17年度に制作した『篠原の昔と今』、および18年度制作の『水道筋周辺地域のむかし』の両冊子は、HP上での告知が奏功して、本年度も断続的に配布依頼が続き、特に前者は配布可能な在庫がすべて消化するに至った。後者も平成21年2月28日現在で残りおよそ250部となっている。

21年度以降の活動は未定だが、『水道筋周辺地域のむかし』のようなブックレット制作を軸に活動できればと考えている。（文責・木村修二）

神戸市淡河における連携事業

1. 淡河歴史セミナー

2003年度からおこなっている淡河町自治協議会、神戸市教育委員会との連携事業を引き続き、今年度もおこなった。

2003年以来、年2回、市教委と地域連携センターとが交互に企画して、講演会形式の淡河歴史セ

ミナーを開催し、昨年度までに10回の講演がおこなわれたが、回を重ねるに従って、新しい講演の題材を考え、講師を選定する困難性が増してきたこと、また、参加者が漸減し、講演会という形式のみでは、住民の主体的な歴史についての取り組みを喚起することにつながりにくいことなどが、今年度は課題として見えてきた。こうした問題意識に基づき、今年度は試験的にフィールドワークと展示会という、講演会以外の形式で歴史セミナーを開催した。

11月29日の第11回淡河歴史セミナーでは、地域連携センターが企画し、「フィールドワーク&地図づくり 淡河町の戦国を歩く」と題し、淡河城跡や旧湯山街道など、淡河本町周辺を見学した。単に見学するだけでなく、見学の後に、大きな見学地の白地図を用いて、参加者に、撮影した写真を貼り付けたり、屋号などの情報を書き込んでもらうなど、地図をつくるという作業をすることで、能動的な参加ができるよう試みた。

2月22日の第2回淡河歴史セミナーでは、市教委が企画し、「発掘！淡河の歴史」と題し、神戸市北区役所淡河連絡所で、淡河の旧村ごとに、発掘された遺物の展示会をおこなった。淡河地域で発掘された遺物が、これだけ一堂に会する機会は初めてであり、旧村ごとに展示されていたこともあって、来場者は、自分の居住地の遺物を熱心に見学するなど、好評を得られた。

ただ、今年度の企画が、単に目先を変えただけに終わらず、前記の問題の解消につながるかどうかについては、なお今後、事業を進める上で考えていく必要があるだろう。

2. 石峯寺史料調査

淡河石峯寺の宝蔵調査を2006年度から2007年度にかけておこなったが、この調査成果について、収蔵品の目録を作成し、調査成果を所蔵者に還元した。また昨年度まで『新修神戸市史』の編纂事業について、地域連携センターがおこなった受託研究の中で、石峯寺の史料調査を進めてきたが、新修神戸市史の調査期間が昨年度までで終了したため、石峯寺子院の竹林寺・十輪院の史料調査の未了部分については、引き続き地域連携センターがおこなうこととなった。石峯寺から史料を1年間の予定で借用し、調査、撮影と目録作成を進める。

3. その他

三木市立堀光美術館で、12月6日から21日まで企画展「三木の描かれた中世の城郭」がおこなわれた。その企画展に中世城郭の復元絵画を出品する木内内則氏に、淡河城の史料を提供し、協力した。（文責・村井良介）

神戸市文書館との連携事業

一昨年度より始まった、神戸市文書館との地域史料の収集整理・公開・活用に関する共同研究事業を本年度も継続し、文書館の開館日である月曜～金曜の午後、センター研究員の人見佐知子、森田と人文学研究科学術推進研究員の三村昌司氏が館に在駐して事業を進めた。

事業内容としては、まず、前年度からの継続として、①館蔵史資料の整理及び史資料の管理方法や利用環境の改善、②市民から館への史資料の閲覧も含めたリファレンスへの対応、③史資料の出納等のカウンター業務への協力を行った。①については、具体的な成果として、未整理であった「平田家文書」（9点）「小泉祥晃氏寄贈文書」（39点）「昭和二年兵庫県会議員選挙書類」（32点）の整理・解題作成を行うとともに、一応整理済みであるが、目録の不備により公開・活用に至っていない「内田家文書」（1392点）と「八尾家文書」（423点）の目録の点検・整備を行った。これらについては、来年度の公開を予定している。

上加えて、本年度、新たな試みとして、④館蔵文書を利用した企画展「井上善右衛門家文書展」を開催した（前期：8月18日～29日、後期：9月16日～26日）。これは、NHK学園（通信講座）から館への古文書講座の開催依頼にセンターが協力し、研究員の添田仁が「井上善右衛門家文書」を中心に用いて行った講座の成果を活用したもので、会期中、前期110名、後期57名の来館者があり、おおむね好評を得ることができた。

本事業については、すでに来年度への継続が決定されており、上記①②に関わる新たな事業として、館蔵史資料の総合的なデータベースの構築や館のホームページの改善などを進めることを予定している。今後とも、神戸市文書館が、市域に関わる文書・資料を収集・整理・保存・公開すると

いう、地域の中で果たすべき役割を十全に発揮できるように、一層の協力を努めていきたい。

（文責：森田竜雄）

包括協定にもとづく小野市との連携事業

神戸大学と小野市との間では、2005年1月26日に社会文化にかかわる連携協定が結ばれ、それ以来さまざまな共同事業がすすんでいる。今年度の事業内容は以下の通りである。

1. 小野市立好古館・平成20年度秋季特別展（地域展）「来住地区の近世・近代から現在」開催への協力と博物館実習の実施

昨年度までの小野市河合地区での地域展を終え、今年度は2008年11月1日～12月14日の会期で、「来住地区の近世・近代から現在」と題する展示会を開くことが決定。今年はそれに向けた事前説明会の実施が例年より遅れ、7月から開始。実際の「地域調べ学習」も8月から始まり、合わせて11地区23回ほどおこなわれた。

これに対してセンターでは、筆者を含めた教員3名が計14回、研究員2名が計3回、実習生2名が計16回、そのほか自主参加した学生3名が計8回、重複も含めて延べ41回の参加協力をおこなった。このうち「自主参加」というのは、大学の講義で好古館の取組を知って興味をもって参加した学生のこと、この事業が少なくない学生の関心を惹きつけていることが分かる。



今年度は「地域調べ学習」に参加する場合、なるべく同一地区を2回セットで参加するよう呼びかけたので、昨年度まで以上に、スムーズな動き

が出来た。もちろん各地区の地元の方々の熱心な取り組み、あるいは来住小学校の地区担当の先生方の積極的なご指導・援助があったことにより、全体として今年度の「調べ学習」は上手く運んだことは言うまでもない。

なお今年度は、センターが同じく連携して「まちづくり」をすすめている丹波市春日町の棚原パワーアップ事業推進委員会2名の方にお越し願ひ、「地域調べ学習」の取り組みを見学していただく機会も設けた（8月20日・下住町2組にて）。このような地域間の横のつながりを強めていくことも、大学の果たすべき任務の一つであろう。

2. 「青野原俘虜収容所の里帰り展示会と演奏会」のウィーンでの共同開催

2005年度に好古館で開いた地域特別展「青野原俘虜収容所の世界」展、および俘虜による演奏会の再現コンサートをオーストリアのウィーンで開くことは、昨年度から準備が重ねられてきた。これは地域の歴史を調べ、展示・活用していこうとする地道な活動を、世界とも結ぶ国際的な事業に発展しようとする試みの一つである。

小野市側および神戸大学関係者のさまざまな形での経済的支援・協賛により、展示会は、2008年9月3日～10月29日の会期で、俘虜兵の祖国の一つオーストリアの国家文書館で開かれた。またその間、9月初旬には、神戸大学交響楽団有志による「里帰りコンサート」もおこなわれ、たくさんのお見学者と観客が訪れ、日墺両国、およびウィーン市民と小野市民、さらには神戸大学との間の交流が深められることになった（詳細は、神戸大学地域連携推進室発行『地域・だいがく連携通信』第3号、2008年10月を参照のこと）。

今後は新たな発見された「青野原」関連資料等の分析を深めつつ、東京などでの「俘虜収容所展」の開催を計画中である。

3. 『国宝浄土寺パンフ』外国語版の作成協力

2007年秋頃、小野市観光協会から依頼のあった『国宝浄土寺 ～小野市の歴史を歩く～』パンフの外国語版の作成協力をおこない、2008年12月に実物が完成した。この外国語版には、日本語による浄土寺の解説のほか、英語・ハングル・中国語の3国語による解説文作成の要望がセンターに対

してあった。英語版を中井志保氏（神戸市外国語大学元学生）、ハングル版を柳教烈氏（韓国海洋大学校教授）・金貞蘭氏（神戸大学院生）・権京仙（神戸大学院生）、中国語版を項巧峰氏（神戸大学院生）・洪波氏（神戸大学院生）に原稿依頼と校正をお願いし、坂江渉が全体監修をおこなった。（文責・坂江渉）

丹波市春日町棚原地区・丹波市教育委員会との連携事業

平成19年度（2007）に引き続き、今年度も棚原パワーアップ事業推進委員会や丹波市教育委員会と連携した事業を展開することができた。本年度の事業成果と課題の概要は以下の通りである。

1. 丹波市内自治会、個人所蔵文書調査

丹波市と神戸大学大学院人文学研究科との協定（2007年8月締結）に基づいて、自治会文書調査活動を行うことにした。

昨年度は、春日町棚原地区のようなモデル地区を山南町でも作ることを目標にして活動を行い、その結果若林地区住民を対象にして、同自治会文書や地区住民宅の文書に関する現地説明会を開催することができた。

今年度は、若林地区のように文書調査と現地説明会をセットで行えるモデル地区を普及すべく各自治会を訪問調査した。その際には、過去に史料調査が済んでおり、史料の所在が把握されているにもかかわらず、昨年度のアンケート結果で「史料はない」と答えた地区（＝五ヶ野・和田・小野尻・西谷・前川）を重点的に調査することとした。この内、和田（三省館）・小野尻地区を訪問した。その結果、三省館には昭和以降の自治会文書が保存され、古い文書は保管されていなかった。また、小野尻自治会文書については、和田晴夫氏作成目録よりも多くの文書を「発見」することができ、目録の再整理と、絵図の修復を行い、地元に戻却することができた。

他には、谷川・奥・阿草・岡本地区のように調査申し出のあった自治会を訪問し、谷川・岡本地区では保管状況の確認を行い、奥地区では撮影も行った。ただ、阿草地区のように、訪問当日、文書保管蔵の鍵がなく、所在を確認することが出

来なかった箇所もあった。

個人所蔵分では、山南町内大河の西垣達也家文書の保管状況を確認することができた。ご当主がかつて作成しておられた目録を Excel に再整理した（計 287 点）。北太田の西垣家文書については、昨年度より引き続き行っている撮影を完了し、現在目録を作成中である。谷川の大木氏所蔵絵図については、全点撮影を行った。谷川の若宮神社文書については、撮影と史料翻刻を行った。和田の木戸せつみ家では、文書の保管状況の確認を行った。その結果、文書や刊本とともに、『写真和田村史』などで使用された写真が多く保管されていることが判明。一部状態が悪いため借用し、スキャニングしてデジタルデータ化を行っている最中である。今後、山南中央公民館で「和田の今昔」と題し展示予定である。

春日町内では、昨年度より引き続き波多家文書の整理を行っている。当初予定分（185 点）は終了したが、さらに波多家より「発見」された史料群も残されており、現在未整理の状況である。また、棚原の久下家からは、長らく所在が不明であった久下家の「農業稼仕様」などの農書の原本を確認することができた。久下家軸物の撮影も終了し、久下家には「山南町北太田西垣家」「春日町棚原久下家」の両方の文書群についての史料を返却することができた。

氷上町内では、成松の田中克二家文書の調査・表題の撮影を行った。近世史料が入っている長持分は未着手だが、近代文書分の現状記録・仮目録とりが終了している。

山南町自治会文書整理作業については、和田晴夫氏がかつて調査済みの箇所もあったが、まだ目録に掲載されていない文書が発見されたこと、自治会文書調査を契機として個人蔵の文書調査依頼が増えたこと、自治会文書のもつ重要性を地区住民に理解していただいたこと自体は、評価することができよう。ただし、月に一度の訪問ペースでは、年度中での全自治会を訪問することができなかったため悉皆調査にはならず、かといって若林モデルを積極的に実践してみようとする地区も少なく、モデル地区づくりという点では課題が残った。しかし、その中でも、奥自治会では、史料解説の要求もあり、地区住民の文書への関心は高い。和田の木戸家から借用している古写真なども興味を引く素材であるために、ともに史料展示・

現地説明会を開催することが望ましい。ただし、年度内の開催は残念ながら日程調整がうまくゆかず、今年 4 月以降に開催する予定である。

2. 棚原パワーアップ事業推進委員会との連携事業

昨年度に引き続き、今年度も棚原地区住民との連携事業を進めることができた。昨年度までは、地区住民の有志による「棚原区パワーアップ事業推進委員会」が主催してきたが、今年度からは、「棚原自治会」が主体となって、パワーアップ事業に申請し、補助金を得ている。そのため、昨年度よりも一層地区住民の理解と協力が得られる体制になっている。



今年度は、「棚原の歴史をめぐる里山公園づくり」事業を同自治会がたちあげ、センターはそのコンテンツづくりに協力を行った。具体的には、天満神社本尊調査・各史跡の伝承研究・進修小学校や氷上特殊支援学校との連携・三大大池の活用策の検討・展望台設置のための立地調査・久下家文書に伝わる農書からの伝統農法復元のための基礎的調査を行った。今年度は、進修学校林の整備も行い、全体として公園作りのための準備期間となった。（文責・松下正和）

伊丹市における連携事業

1. 伊丹酒造組合主催 -田植えから酒造りまで-

伊丹酒造組合では、日本酒のアピールとともに、酒造りを身近に知ってもらおうと、毎年、1年間を通じたイベントとして「田植えから酒造りまで」を開催している。参加者は公募によりおよ

そ 60 人。参加費大人 6000 円。子供 1000 円。

5 月 25 日、曇り空のなか、猪名川町の自治会長さんその他の方々も参加されて田圃 1 反に酒米山田錦が植えられた。一人の分担はあまり多くないが、慣れない作業はなかなか大変である。お昼はオムスビとお茶というごくシンプルな献立だが、外での食事もいいものである。帰りは、田圃の近くの腐葉土の中にいるカブトムシの幼虫のお土産つきであった。

10月12日、稲刈りが行われた。田植えからこれまでの間、草取り、その他の手のかかる作業は、田圃の持ち主の方が丁寧に面倒をみてくださっている。稲刈り当日はお天気もよく作業は順調に進んだ。稲刈りのかたわら、町の方たちがお餅を搗いてくださり、お昼はオムスビと出来たてのお餅をその場でいただくという野趣にあふれたものである。刈り取った稲は天日干しにして、作業は終わった。この日も黒豆の枝豆 1 キロが会員各位にお土産として用意された。

12 月 7 日、酒蔵見学。いよいよ酒の仕込みである。猪名川町の川辺酒造の蔵で行われた。現地に行くとすでに蔵からもうもうと真っ白な蒸気があがり、蒸米のよい匂いがしている。木造建築の古い蔵が蒸気につつまれている風景は迫力がある。酒造り暦 50 年という杜氏さんが作業をしているそばで酒造りの説明を受けた後、この日のもう 1 つの作業に移った。

杉玉（酒林）づくりである。杉玉は新酒ができたことを知らせるために酒家の軒先の吊るした杉でつくった球形の標識。この日のために前もって一度講習を受けたのだが、むつかしいものである。一度やっただけではあるが、誰もがはじめてなので講師にならざるを得ない。この作業は皆さんが夢中になり、お昼も 10 分ほどで食事をすませ、休み時間もなしに作業の続きに取り掛かるといふ熱心さである。大量の杉葉は猪名川町の方にお世話になった。大きな杉玉、小さな杉玉、それぞれつくったものを持ち帰り、終了しなかった方は帰ってから仕上げるよう杉葉を持ち帰られた。

年も押し詰まった 12 月 28 日、今回仕込んで瓶詰めされた酒にラベルを張ることと、試飲会を兼ねた懇親会が行われた。ラベルは会員各自が好みのデザインを選び、それを酒造組合で編集したものである。自分だけのラベルができるので、友人知人に贈る方も多い。酒造りの一部をほんの少

し体験する企画ではあるが、参加者はリピーターが多く、年間を通しての企画を楽しまれているようである。

今年で 6 回を数えるこのイベントだが、次からは準備や運営の負担を分散させる方向に持って行かないと維持することがむつかしいことも事実である。猪名川町と提携してできないかというのも一つの方法として検討されている。

2. 伊丹酒造組合主催・酒造家史料を読む会・文政の酒造り

「酒造家史料を読む会」は発足から四年が過ぎた。金曜日の午後 6 時からという時間帯は社員の方たちにとってどうしても参加できないことも多々であるが、熱心に取り組みされている。酒家の申し合わせや江戸問屋からの書状を読み、ことに江戸問屋からの書状によって、文化文政期あたりから、市場の好みは濃味の酒から薄造りの酒に変化していることがわかる。これについては、9 年前の小西新右衛門氏文書による元禄 15 年の「白雪」の復刻・販売に続き、一昨年度試作した文政 8 年の「白雪」がはじめて販売されたが、元禄・文政の両度の酒造りによって、120 年ほどのあいだに濃味酒から薄味の酒になっていることが如実に確かめられた。実際の酒の味で確かめられたことは、史料で知ったこととはまた違った感動がある。

古文書の勉強会も 5 年目にはいり、今年では会員一同で今まで学習したことを中心に展示会を開きたいという声が出ている。時期的なことや期間、どのような展示にするかなどをこれから詰めてゆくことになる。

3. 伊丹市御願塚・御願塚歴史保存会との連携事業（御願塚マップ作成委員会）

伊丹市御願塚地域にある御願塚古墳（帆立貝式前方後円墳）の保存・整備とまちづくり活動を行っている御願塚古墳保存会のプロジェクトの一つとして 6 人の委員ではじめられた地域（御願塚の須佐男神社の秋祭りにおける太鼓台の巡行範囲である御願塚・稲野地区）のマップ作りも 3 年になる。この間、地域を特徴づける古墳、神社や寺、家屋、地域の博物館、特産野菜、行事、およびそれらにまつわる史料集め、聞き取り調査を行ってきた。マップのタイトルも「御願塚ふるさ

とマップ」と決まり、年末にはマップのイラストレーターに来ていただき、また印刷業者の検討が行われて、ようやく完成のかたちがみえてきた。

委員会では、今後、マップの完成にとともに、どのように地域内外にアピールしてゆくかを検討する予定である。まず、地域の自治会館等において、マップとともに「御願塚自治会文書」や個人蔵文書の展示、地域の方々によるパネルディスカッション等も考えられている。さらに、マップに続き、御願塚・稲野地域の案内書の作成等の声もあり、もうしばらく委員会は存続しそうである。（文責・石川道子）

尼崎市富松における連携事業

尼崎市富松にある中世城郭富松城跡の保存をめぐって活動する「富松城跡を活かすまちづくり委員会」などと連携し、web上の仮想博物館「富松城歴史博物館」を作成するなどの事業を、引き続き推進した。

特に2007年6月に刊行された富松城跡を活かすまちづくり委員会編『もっと知りたい中世の富松城と富松』について、地域連携センターのwebページ上で広報するなど、普及活動に努めた。（文責・村井良介）

宝塚市山本共有財産管理組合との連携事業

昨年9月頃、山本共有財産管理組合より宝塚市立図書館市史資料室に、宝塚市山本地区に残る地図その他の史料を中心とした事業を展開できないかというお話が持ち込まれた旨が地域連携センターに伝えられ、9月5日に組合長藤本氏がセンターに来訪された。

山本地区は木接太夫で有名な植木所である。同月16日に松下・河野・石川が藤本氏宅にうかがい組合員の方を交えて、どのようなことができるかを検討し、一応、今年の秋か、あるいは来春の植木祭りにあわせて同じ会場（あいあいパーク）で史料の展示をしてはどうかという話になったが、その前に、例年2月に開催される組合の総会のあと、山本地区に関する講演会を行うことになった。これについては、昨年、宝塚市史資料室を

通して話をさせてもらっていたので、今年は昨年の講演のテーマを踏まえて、当地域の近世の交通についての講演を行った(石川)。秋あるいは来春の展示については、植木祭りの内容や会場の状態なども含めてこれから詰めてゆくことになる。

（文責・石川道子）

加西市との連携事業 -旧海軍鶴野飛行場戦争遺跡調査-

加西市と人文学研究科地域連携センターは、加西市鶴野町に残されている旧海軍鶴野飛行場滑走路跡地周辺の文化財調査を、2008年、2009年、2010年度の3か年で実施する予定である。2008年度は、加西市と神戸大学の間での調整に手間取り、調査の開始が遅れた。

2008年度は、滑走路周辺の南部公民館で、近隣の住民達を対象に、「戦争遺跡調査と鶴野飛行場」と題した講演会をおこなった。内容は、近代遺跡、とりわけ戦争遺跡の文化的意義すなわち地域歴史遺産の意味を説明し、その中で鶴野飛行場を考えていこうというものである。これは、戦争遺跡も地域での話を含めて次代に受け継いでいく地域歴史遺産であることを認識してもらうためのもので、来年度以降、飛行場周辺の住民に対し、聞き取り調査をおこなうための準備でもあった。

加西市では、3月20日（金・祝）には、「加西ロマンの里ウォーキング 戦争の足跡をたどるコース」がおこなう。コースは、北条鉄道法華口駅から、旧海軍鶴野飛行場跡史跡群（トイレ休憩）を通り、法華口駅にもどるものである。市民に旧海軍鶴野飛行場跡を実際に見てもらおうのに良い機会になると考えられる。

旧海軍鶴野飛行場跡戦争遺跡は、神戸大学附属食資源教育研究センター内に多く残っている。来年度以降は、その実測も含め、引き続き調査をおこなっていく予定である。（文責・佐々木和子）

朝来市生野町との連携事業

朝来市生野町と神戸大学の「連携協力に関する協定」は、昨年度に3年目という区切りをむかえた。

今年度は、昨年度までの経験と成果を活かし、新たな方向性を見出すことを意識しながら事業を展開した。

1. 石川家文書の整理

生野銀山南の旧森垣村に位置した石川家が所蔵する古文書の整理を開始した。石川家は、江戸時代から龍野屋という屋号で宿屋や薬屋を営みながら、大庄屋や本陣をつとめ、大正期以降は醤油屋を営んだ巨大地主・商家であった。また生野代官所役人や町内の山師・郷宿・掛屋とも縁戚・金融関係を持ち、互いに銀山・代官所の経営をめぐる連絡を取り合うなど、鉾山の近郊農村にありながら、生野銀山・鉾山町とも深いかわりを持っていた。

同家古文書の整理には、添田仁と森田竜雄があたった。整理は、ご当主の方が古文書を蔵から少しずつ持ち出すかたちで、生野書院においておこなった。まずは、持ち出された箱や引出しごとに番号を付し、ご当主のお話と蔵のなかの写真をたよりにそれぞれの保管場所を特定した。次に、箱や引出しごとにおおまかな内容と数を記録して、古文書群の全体像の把握につとめた。現段階で、数量については約1万点を確認している。中身についても、多くの土地証文や鉾物の津出を記録した巨大な帳簿、鉾山町内とのやりとりを示す書翰、さらに行方不明とされていた石川家当主による日記など、同家の多角経営を反映して多種多様な文書を確認している。

来年度は、全体像の把握とともに、あわせて各文書のカード作成・内容把握も進めていく。

2. シンポジウム「生野の歴史再発見—森垣村石川家と生野銀山—」の開催

平成21年2月28日～3月1日、朝来市生野マインホールにおいて、シンポジウム「生野の歴史再発見—森垣村石川家と生野銀山—」を開催した。これは、生野の方々に石川家文書にふれてもらいながら、整理を進めるなかで明らかになった生野銀山の歴史や、同文書群の意義について考えてもらうことを目指して開催したものである。プログラムは下記の通り。

- 2月28日(土)15:20～古文書から掘りおこした歴史講演会①・森田竜雄（神戸大学学術推進研究員）「肖像・墓碑銘・過去帳からみた石川家」。
16:30～石川家の古文書にふれてみよう会②。
- 3月1日(日)9:00～石川家の古文書にふれてみよ

う会。14:00～石川家のおもひで座談会③。

①は、石川家文書の整理を進めるなかで明らかになった史実を、生野町の方々に還元するためにおこなった講演会である。石川家の歴代当主について、同家の掛け軸に描かれた肖像や墓碑銘、過去帳などから詳細に分析し、報告した。石川家の方々にとっては、先祖の事跡が具体的に明らかにできるという意味において有意義な内容であった。また、今後、石川家文書の整理を進めていく上で必要な基礎的情報を得ることができた。

②では、石川家文書の整理を、生野町の方々と神戸大学の院生が協同でおこなった。例年のように、一度整理を終えた古文書ではなく、未着手のものを使用した。桐箱に入った古文書の保存状態をデッサンしながら記録し、その上で整理をおこない、もとの桐箱に戻すという一連の作業を体験した。

③では、石川家が輩出した歴史家である石川準吉氏のご子息である石川通敬さんと、石川家ご当主の石川道代さんにご講演いただいた。石川通敬さんは、準吉氏の官僚と歴史家、両面の功績について、父親としての素顔も紹介しながら説明した。一般には知られていない準吉氏の功績も多く、石川道代さんも驚くほどであった。一方、石川道代さんは、実際に手元に残っている古文書や道具類を披露しながら、大商家ならではの経験や歴史、さらには古文書を所有している家の苦悩や、古文書を保存することの意味について語った。最後は、サロン形式にし、参加者が実際に資料を手にとって、石川道代さんと語らう場面も多くみられた。

シンポジウムに参加した方からは「肖像や墓碑などからひもとかれた歴史は、生野銀山が栄えたその時代をととも身近に生きた歴史として感じることができた」、「文字を読むことだけが古文書整理ではないのだと改めて認識する事ができた」、「座談会では古文書を所蔵する方たちの抱える悩みなど生の声を聞くことができた」といった声が寄せられた。

本シンポジウムは、石川家が輩出した歴史家である石川準吉氏の生誕100周年ということで、同氏の功績をたどり、市民に石川準吉という人物を知ってもらうことで、石川家文書の歴史的意義を広く知ってもらうという意図を持っている。今後、新出資料である石川家文書を整理・活用することを通じて、地域の歴史の掘り起こしをすすめていく、そのための進水式として位置づくものである。

3. 企画展「生野代官所の世界」の開催

シンポジウムにあわせて、2/28-3/22 に生野書院展示室において企画展「生野代官所の世界」を開催した。これは、『生野史』の記述を、より分かりやすいかたちで市民に紹介するために開催したものである。生野代官所や地役人の概要についてまとめたパネルを4枚、古文書を10点展示し、それぞれにキャプションを付した。ただ、一般の方には内容が難しかったようで、「観光客の興味をひくための工夫として、まず説明を大きな文字にすべき」、「テープでも流して理解を助けるべき」、「史料棚を設置して、古文書を見やすくしてほしい」といった声が聞かれた。

来年度については、本事業を朝来市全体として、また「近代化遺産」や「文化的景観」の問題と絡み合うようなかたちで拡充させていくために、有効な方法をさぐる必要がある。（文責・添田仁）

福崎町との連携事業

福崎町立神崎郡歴史民俗資料館の「連続講座」（3回分）に、人文学研究科教員・センター研究員を講師として派遣し、協力を行った。講演会は、以下の通り。

- ① 5/24 奥村弘「地域歴史遺産とは一文化財の新しい見方を考えるー」
- ② 7/19 河野未央「水害で被災した史料の修復ワークショップ」
- ③ 11/22 松下正和「地域の歴史遺産を活かしたまちづくり～丹波市での事例を中心に」

奥村報告では、「地域歴史遺産」とは何か、文化財を取りまく近年の新たな状況や、そこから生まれてきている文化財活用の可能性などについてふれられた。

河野氏による水損史料修復ワークショップでは、「地域歴史遺産」としての史料が水損した場合の応急処置法として、ペーパータオルによる吸水乾燥の実演が行われ、参加者も一緒に吸水乾燥を体験することができた。

松下報告は、この「地域歴史遺産」を活用したまちづくり例として、丹波市の事例を中心に紹介したものであった。特に、地元史料を地元の方が中心となり、整理、解説、地域の方々に成果を全戸配付したり、展示施設で資料を紹介する取り

組みの有効性（棚原モデル）について解説を行った。ただ、いきなり地域歴史遺産を活用したまちづくりを考えるのではなく、ひとまずは自分たちの住む地域にどんな歴史資料があるのか、それらの資料が存在するまちの価値を知ることが大切であると指摘した。

本講座の参加者は、各地区から参加されており、あまり地域的偏りがないのが特色である。その中でも、特に元気だったのは、辻川地区である。来年度は、辻川地区住民との連携事業へ協力を行う予定である。（文責・松下正和）

国営明石海峡公園神戸地区（神戸市北区山田町藍那地区）の調査研究事業

本事業は、平成16年度、国営明石海峡公園神戸地区（以下、「公園」とする）の整備に伴う、国土交通省近畿地方整備局国営明石海峡公園事務所からの受託研究「藍那地域の歴史的環境に関する調査及び活用についての研究」に基づく事業として開始され、以来、4年間にわたり、公園の園地にあたる藍那地区の歴史と歴史的遺産を活かした公園づくりに寄与すべく、史料調査や聞き取り調査、地区内の歴史的遺産に関するテーマ研究、歴史的遺産を紹介するマップ・パンフレットの作成等に取り組んできた。しかし昨年度末、公園事務所からの受託の打ち切りが決まり、結果、本事業は、受託研究事業としては昨年度をもって終了することになった。ただし、昨年度、事情により年間の事業計画が遅延し、研究成果報告書の作成が年度内に終わらなかったため、実際の事業の完了は本年度に及んだ。

報告書作成後、本年度以降の事業の扱いについて検討が行われ、公園への調査研究成果の還元の余地がまだ残されていること、また、事業を通じて地元藍那地区との関係が深まりつつあって、地区との連携事業としての展開が見込めることから、センター主体の事業として事業を継続することになった。今後は、調査研究も引き続き行うものの、展示会や講演会の開催、パンフレット・ブックレットの提供等を通じた調査研究成果の公園及び地区への還元特に力を入れ、地域の歴史と歴史的遺産を活かした公園づくり・まちづくりに貢献していくことを目指す。その一環として、本

年度は、2008年11月16日（土）に、公園現地で開催された第10回あいな里山まつり（主催：第10回あいな里山まつり実行委員会／国営明石海峡公園事務所）に調査研究成果を紹介するパネル4枚を出展し、パンフレットを配布した。

なお、本事業については、来年度以降、調査研究成果を大学院教育改革支援プログラムの中で活用していくことも検討中である。（文責：森田竜雄）

国土交通省神戸港湾事務所、NPO法人「近畿みなとの達人」との連携事業

国土交通省神戸港湾事務所およびNPO法人「近畿みなとの達人」との連携事業は、2005年度の神戸大学での日本西洋史学会の開催時から始まり、2006年度、2007年度については、みなとまちづくり生涯学習講座やシンポジウム開催への協力（講師派遣等）、尼崎・神戸・兵庫3港の「みなとまち絵地図」作成への協力等、さまざまな連携事業をおこなってきた。

今年度は諸般の事情により、これまで通りの連携関係は結ばなかったが、2008年2月末～新年度にかけての事業、「東神戸みなとまち絵地図」の作成・刊行協力をおこなった（編集は株式会社ブルハウス）。



4月以降、完成した絵地図を、文学部での講義「地域歴史遺産保全活用基礎論」やセンターの関わる企画等で配付するなどして、好評を得た。（文責：坂江渉）

神戸市東灘区御影石町木村酒造「木村家文書」の整理・調査 -木村家文書目録-

一昨年 11 月にお預かりした神戸市東灘区御影の酒造元木村家の文書およそ 4000 点の目録が完成したが、目録を出版する予算が皆無であり、見本を作っただけで中止している。

また、文書の置き所が決まらなく、現在は、調査時から引き続き伊丹酒造組合に預かっているが、次にどのような作業を行うか、所蔵場所未確定、予算 0 というなかで行き詰まっている状態である。良質の史料なので何とかしたいのだが。（文責：石川道子）

『新修神戸市史』の編纂事業

2006年度から、神戸市文書館と連携し、『新修神戸市史』の編纂について、受託研究を進めてきた。昨年度までに史料調査などはひとまず終え、今年度は『歴史編Ⅱ 古代・中世』の編集作業を進めた。

また、昨年度までおこなった淡河石峯寺の史料調査については、石峯寺の調査は終了したものの、子院の竹林寺・十輪院の調査に未了部分があることから、今年度からは、地域連携センターの神戸市淡河との連携事業の中で調査を継続し、調査成果を新修神戸市史の編纂事業にも還元することとなった。（文責：村井良介）

『播磨新宮町史』の編纂事業

1. 『播磨新宮町史』本文編（近現代）

『播磨新宮町史』本文編（近現代）については、原稿が出そろい版組、校正が進んでいたにもかかわらず、刊行予算のめどが立たないことにより事業が滞っていたが、2009年度予算で刊行できる見通しが立ったため、2008年度後半から動きが再開した。10月19日に行われた町史編集担当者と執筆者（一部）との協議では、懸案となっている記事の取り扱いや、町側の希望による加筆・修正について細かい打ち合わせが行われ、前者については町側で調整をはかり、後

者については執筆者側で努力することになった。年度末にはほぼ加筆・修正が完了し、2009年度の早い段階での刊行に向けて、事業が進んでいる。(文責・河島真)

2. 『播磨新宮町史』史料編(古代・中世・近世)の活用事業

詳細については、本報告書の第9章「地域連携研究」の神戸大学近世地域史研究会の項を参照のこと。

『三田市史』の編纂事業

地域連携センター担当教員等が編集・執筆に関わっている『三田市史』近代史部門は、本文編の刊行に向けて2008年度はほぼ2カ月に1回のペースで定期的に部会を開催し、編集のコンセプトや執筆分担・目次等の確認・検討を行いながら、年度後半には各執筆者が担当部分についての執筆構想を発表し、全員で討議し課題意識を共有する取り組みを行ってきた。2009年2月までで全執筆者の執筆構想の検討が終わり、そこで明らかになった課題について、各執筆者ごとの調査・研究を継続しているところである。年度末の3月には第1回目次案が確定する見通しである。

以上のような『三田市史』刊行事業から派生して、三田市域に位置する兵庫県立三田祥雲館高等学校、三田市、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの三者が連携して開催する「祥雲文化セミナー」の構想が進んでいる。これは、三田祥雲館高校の研究授業に地域連携センター担当教員が参加した際に、三田市史編さん担当者も交えて、市民と高校生とが共に地域について学び合う場が設けられないかという話をしたことがきっかけとなって具体化したものである。

手始めとして、2009年2月20日(金)に本センター事業責任者の奥村弘が「地域の歴史文化遺産から地域作りを考える」というテーマで講演会を行った。講演会は三田祥雲館高校の大講義棟で行われ、約70名の市民、高校生が参加した。「祥雲館文化セミナー」は2009年度から年数回のペースで開催すべく、現在三者間の協議が進められているところである。(文責・河島真)

『香寺町史』の編纂事業

昨年度に引き続いて『香寺町史 村の歴史』の「通史資料編」と「通史編」の編纂事業を共同研究として進めた。今年度は特に、年度末に予定している「通史資料編」の刊行作業が進められた。全体の編集委員会の会議は以下の日程で行われた。

■第11回編集委員会 2008年5月11日(日)、第12回 2008年7月13日(日)、第13回 2008年9月21日(日) ※1、第14回 2008年11月2日(日)、第15回 2009年1月24日(土)、第16回 2009年3月15日(日) 予定 ※2。

(※1 = 委員会後に、香寺歴史研究会会員と編集委員との懇談会を開催。 ※2 = 委員会後に、香寺歴史研究会会員と考古・古代・中世の委員との意見交換会を実施予定)

なお部会ごとに編集作業部会・会議・調査などが行われているが、その日程については省略する。

2008年9月21日に行われた懇談会では、編集委員から歴史研究会会員の方々へ「通史資料編」の構想が説明され、また会員の方からはいくつかの質問があり、「通史資料編」とともに「通史編」へ地域の方々の疑問や興味等が反映するための機会があった。



編集委員会では、年度末刊行予定の「通史資料編」の細部に至るまでの編集の方針が話し合われた。町民の方々にとってわかりやすく親しみやすい町史を目指し、そしてこの「通史資料編」を元にしてさらに香寺町の歴史を考え、深める機会に

してもらうため、特に読みやすさにこだわって作業・話し合いが進められた。

具体的には掲載する史料の決定とその史料に解説をつけるだけでなく、綱文や語句の注、史料の概要などを充実させる方針が確認され、編集作業・校正が進んだ。また、「通史編」の構想・内容についても議論が行われた。来年度は「通史編」の編纂作業が中心となる予定である。（文責・深見貴成）

第3章 歴史資料と被災史料の保全・活用事業

兵庫県公館県政資料館歴史資料部門との連携事業

兵庫県公館県政資料館（歴史資料部門）との連携事業については、副センター長の奥村が、歴史資料部運営専門委員となっているが、積極的な連携事業は行われなかった。（文責・奥村弘）

神戸を中心とする文献資料所在確認調査

本年度該事業の主な活動は以下の通りである。

1. 中央区北野地区・西脇家文書への対応

昨年度に引き続き古文書勉強会をおよそ月1回のペースで継続してきた。同会は今後も継続予定である。また、同文書所蔵者である西脇美代子さんの強い希望によりこの文書群を本学文学部へ寄贈していただく方向で話がまとまった。事務手続きを終え次第、本文書群は古文書室へ収蔵される予定である。

2. 財団法人住吉学園との連携事業

事実上昨年度より始まった同学園との連携事業は、住吉地域住民有志と当センターとの交流を通じて、『新・住吉村誌(仮)』の編さんを目指す方向で進みつつある。『住吉村誌』は戦前・戦中に編さんが進み、終戦直後の昭和21年（1946）に一部削除されながらも発刊されている。その後昭和47年（1972）には戦後の住吉村（神戸市と合併後

は住吉地区）の歴史・地誌を中心に、前次『村誌』で削除された部分を再録する形で『続住吉村誌』が発刊されているので、それ以来の住吉地域誌ということになる。住吉地区は第二次大戦時の米軍による空襲で大きな被害をうけた地域なので文献史料の残存が芳しくない土地柄だが、それでもまだまだ未調査のものも多く見込まれ、この機会にそうした文献史料が確認されることが期待される。平成21年2月28日時点で、まだ住吉学園理事会の決定がなされていないが、決定がなされ次第、住吉学園と当センターとの具体的な協議を開始することになる。出来るだけ早い決定を期待したい。

3. 兵庫区平野地区における活動

本項目は、歴史資料ネットワークへの協力の項で詳述する。

4. 淡路市育波地区公民館保管文書の調査

本件は2月中旬に所蔵者から電話による調査要請があったもので、来る3月17日に現地調査が予定されている。詳細は、来年度報告書にまちたい。（文責・木村修二）

神戸市水産会主催「いかなごくぎ煮学認定試験」への協力

神戸市水産会〔神戸市漁業協同組合、兵庫漁業協同組合、財団法人神戸みのりの公社、および神戸市〕は、神戸市の名産品であるイカナゴの釘煮をアピールするために、今年度より「いかなごくぎ煮学認定試験」を実施（試験実施日：平成21年3月15日予定）することになった。当センターは、同会からの要請に基づき、受験者配布用テキスト作成および問題作成に協力した。本件は坂江と木村が担当し、テキスト・問題作成は歴史・文化に関する部門を担当し作成は主に木村が担当した。（文責・木村修二）

羽束の回廊歴史フォーラムへの協力

『住吉大社神代記』の住吉大社解に、川辺郡為奈山の北界として「隈北公田並羽束国